

楽庵ニュース 第7号

2011年12月25日

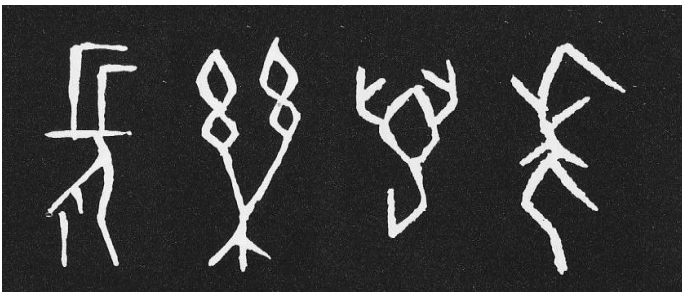
発行元:NPO 法人茅ヶ崎ユニバーサルデザインスクエア
地域活動支援センター 楽庵
茅ヶ崎市浜竹3-4-64石黒ビル2F

TEL&FAX 0467-86-5898

ホームページ <http://park11.wakwak.com/~rakuan>

メールアドレス rakuan@aq.wakwak.com

*長楽萬年(古代文字):楽しいことの幾久しく限りないこと。



楽庵の暮らし

楽庵はユニバーサルデザインを基本として運営してきました。経済も右肩上がりの時代が終わった社会で、付和雷同しない自分をそだてていくことを考えてきました。障碍があるなしにかかわらずわたしたちの生活環境を見直し、今、大切にしていくことや、必要なものは何かを考えながら日一日を暮らしてきました。

エーリツヒフロムは「人間の不幸というのはさあこれからだ」といふときに人生が終わることだ」と言っています。障碍や病気や老いがあるから不幸ではなく、やっとこれからだといふときに寿命が短くることが不幸だといふことです。

家庭や学校や職場という組織のなかでは、どうしても目に見えるお金や成績や立場が大事だったり、規則や世間体のようなことが必要になったりします。可視化できることや規格化されている環境にしていると、上下関係で指示される

ことに慣れ、受身な生き方しかできません。しかし楽庵は生活も世代も違う集団で、お互いに対等な立場で交流をはかります。自分がどんなに頑張っても叶わない生き方の人と出会って自分を知りません。ありのままの自分を受け入れ、自分らしい生き方は何か見えてくるように思います。親や教師や上司は許してくれないことも楽庵の仲間や先輩は許してくれる、認めてもらえる経験をすることで柔軟な生き方ができるようです。寿命がくるまで今をていねいに生きていきたいと思えます。

今回の楽庵ニュースでは楽庵の活動をスタッフとメンバーのことで紹介したいと思えます。開設以来プロとも言える人たちが本気で無償の協力や援助をしてくださいました。地域の方たちや専門家も含めて多くの交流を支えに成り立っています。これからも楽しい交流を続けて参りたいと思えます。

湘南四季の花

晩秋はやはり紅葉が一番だ。浄見寺でも、黄色や紅色が際立っている。
(茅ヶ崎市堤)



楽庵のいま今居間

市民として心身ともに健康でいるためには、仲間の
中でいきいきと過ごせることが大切だと感じています。
ひとりひとり年齢も生活も価値観も身体の状態も
違います。大切なことはお互いが「耳を傾けること」
「目に見えないものまで見る」と「耳を傾けること」
と考えています。共感しあうことや他者のために自分
を与えることを学ぶことが孤立しないで生きる力に



楽庵の活動風景

なります。パソコンや陶芸の活動、手芸や書道や読書
など活動内容は様々ですが、同じ場所を共有すること
で、いろいろな能力を獲得していく他者を見て、お互
いが尊敬し、自分にはない他者を意識します。今年
は「絆」という言葉で表現されていますが、具体的に楽
庵で何ができるのか、地域ネットワーク会議で話し合
い少しずつ具現化してきました。また摂食コミュニケーション
セッション研修会では医師や看護師、理学療法士、作業
療法士、言語聴覚士や管理栄養士や介護職、家族が集
まって専門的な研修を行っています。「毎回の食は生
命へのやさしさではなく一食ごとにただちに生命の刷
新につながる」という名言があるように乳幼児から高
齢者までの新たな「命の文化」を考えています。

地域ネットワーク委員会

委員会は、地域の自治会会長、民生委員、医療・福
祉などの有資格者、住民及び楽庵職員をメンバーとし
て、地域活動支援センター楽庵と地域との共感をもつ
て助け合う仕組みづくりについて協議し語り合う場
です。2ヶ月に1回開催します。今年も楽庵の日常の
活動への提言、地域の障碍のある人たちへの関わり方、
福祉ふれあい祭等の地域行事への参加など熱心に語
り合いました。



地域ネットワーク会議



摂食コミュニケーション研修会

摂食コミュニケーション研修会

茅ヶ崎市に開業している歯科医黒岩恭子先生の長
年にわたる臨床経験を少しでも学べる機会を作りた
いと今年6回実施しました。

脳の可塑性はこどもだけではなく生涯にわたる学
習で可能だといわれるTBI研究所の藤井正子先生
はじめ患者さんから学んだことを専門職や家族で共
有してきました。旧友の理学療法士小山田香さんの
「臥床のポジショニングを科学する」は地域にいる方
にも伝えたい内容でした。

楽庵のスタッフの一員として

楽庵職員 野田恭子

楽庵開設以来、メンバーとの交流や見学者の接待な
どの仕事をしてきました。私は、メンバーが楽しい時
間を過ごしていただけるように配慮してきました。例
えば、今年の夏は節電のために空調の設定温度を高く
設定したので、利用者の方の体調に気を遣ったり、ま
た冬はインフルエンザの流行が心配になるので、洗面
所の掃除に気を遣うなど健康面に配慮してきました。
高次脳機能障害があるメンバーは、環境が悪いと適切
に力が発揮できません。体調が悪ければ一時的に記憶
力や遂行能力が落ちる可能性があります。そこで空調
はまめに調整しています。パソコン作業では、眼精疲
労や肩こりにならないように休憩時間が個別にとれ
るようにしています。また人によっては、ものごとを
自分ではじめられなかったり集中力がなかったりつ
かれやすかったりします。そこで個別に休憩時間をと
れるように声をかけをさせてもらっています。楽庵の仕
事では、街頭キャンペーンでチラシの配布を茅ヶ崎駅
前で行いました。朝の忙しい時間に足を止めてチラシを
受け取る人との交流を楽しんでできました。

僕の一生懸命のこだわり

新井 惇也



陶芸の楽しさは一生懸命に努力して達成感を味わうことです。オリジナルな発想を生かしたりアレンジして今までにない形を創造することは楽しいと感じます。分からないことはメモにして教えてもらったことを守るようにしています。醤油さしやどんぶりやコップやマグカップを作りました。四角の皿や六角形の皿も作りました。いろいろ自分なりにこだわって形に合う釉薬をかけて家族や友人にプレゼントしました。自分のセンスに合う色だといわれるとうれしくて、これからもがんばりたいと思います。まっすぐに頑張りたいと思います。僕にとってこだわりの一生懸命のコップであることをプレゼントした友人や家族にわかってもらえることは本当にうれしいです。いろんなところでもこつこつと頑張っていきたいです。



梨狩り（9月7日 三堀農園）

梨狩り

茅ヶ崎市西久保にある三堀農園にメンバーで外出しました。

梨狩りを楽しんだメンバーのひとり川島厚大君は、「梨狩りははじめてで、歩きにくく姿勢を低くして梨を採るのはつらかった。でもお父さんがよるこんでくれました。幸水を二つとりました。二つ以上採ったら食べきれないと思った。だから、ほどほどにとつてよかったと思いました。梨狩りは楽しく、よい経験だと思えます。今度、外出するならば何か収穫があるイベントがよいと思えます」と感想を述べています。

作品展

今年も市民ギャラリー作品展はじめ、茅ヶ崎カトリック教会バザー、松浪福祉ふれあい祭り、茅ヶ崎養護学校きらめき祭、平和学園小学校学園祭バザー、イオン中央店作品展などで、作品を展示販売できました。メンバーの山口開生君は「陶芸で形を作って素焼き

して先輩の山下君に教えてもらって釉薬をかけた。作業を自分で探すのは大変だったから教えてもらって作業があった。市民ギャラリー作品展には、お母さんも来てくれた。自分の作品が売れるか心配だったけど、売れてうれしかった」と感想を述べています。



イオン茅ヶ崎店作品展

売れ

この人
理事 大塚 由美子さん

障害をもってもその人らしく
社会で生きていくために

・・・家族会ができることから

一歩、一歩・・・

昨日まで普通に暮らしていた人があつたかも知れない人格も変わったかのようなであつたり、身体的な機能も変わつたりと原因も後遺症も多様な方々が日々の暮らしをどう紡ぐのかを共に悩み、共に考え、小さなできることから一歩、又一歩と手探り状態です。活動を開始して十余年が束の間に過ぎました。活動の当初は高次脳機能障害とは何なのか、発生の機序から対応法まで学び、つまるところ、激変した人生をどう捉えて、どう再構築するか、過去へのこだわりから今ある機能を如何に活かすのか等々取り



組んできましたが、問題は今もお山積、動けば動くほどに多様化して新たな問題が発生します。

一方では自助努力とは又異なる次元での問題に直面し、国へ、県へと働きかけることになり、活動の幅は広がり、全国で三団体だった家族会もその形態は異なるものの、今ではほぼ全国にでき、情報の共有、地域の状況に見合った活動を展開しています。神奈川県では県との協働事業として行政との連携も実現し、講演・シンポジウムの開催、行き場のない方々への具体的支援の場、癒しの場の提供、ボランティアの育成等を行っています。

単独の障害として認められることを願ってきたものの、ひとりで全ての障害をもっている人への対応は不可といわれ、精神の分野に組み込まれることにはなつたものの、精神の現場では対応不能と拒否されることが多く、障害の位置づけ、支援のあり方等宙に浮いているが如き状況もあるなか、この度、家族会の活動に対して精神の分野でピネル賞を頂き、漸う障害分野での居場所を得た一歩かなあと感謝しています。

障害があるとかないとか、そんな次元ではなく、社会で生きる全ての人々が尊厳を失うことなく、その人らしい生き方ができる社会であつてほしいと願ひ、できるところから一歩、又一歩と足元を固め

ていきたいと思
いを新
に年の初
めを迎え
たいと思
います。
(NPO
法人脳外
傷友の会
ナナ理事
長)

編集後記

十二月に相模原で開催された「神奈川県脳外傷リハビリテーション講習会」のテーマは「拠点と人材育成、高次脳機能障害者が住み慣れた地域で暮らすために」でした。中でも横浜市瀬谷区のNPO法人の発表は圧巻でした。主婦が立ち上げて「逃げない、投げない、あきらめない」「だけど抱え込まない」をモットウに地域の孤立している方へのサポートを行政よりきめ細かく対応し、現在では年間一億五千万円のコミュニティビジネスを受託している中野しずよさんの発表でした。震災、原発事故と今年には災害の年でした。政治や東電のせいにするのは簡単ですが、思考停止せずに隣人のことを自分なりに考えることが必要だと痛感しました。



神奈川脳外傷リハビリテーション講習会（於相模原）